

持続的なトラウマ  
原発不安の変化と特質に関する研究

成 元 哲  
牛 島 佳 代

『中京大学現代社会学部紀要』 第14巻 第2号 抜 刷

2020年12月 PP. 79~112

# 持続的なトラウマ

## 原発不安の変化と特質に関する研究<sup>1</sup>

成 元 哲  
牛 島 佳 代

### 1. 福島記憶を未来へ：記録なくして事実なし

新型コロナウイルス感染症が世界を席卷するなか、私たちが目の当たりにしているのは、感染リスクをめぐる温度差と対処行動の違い、そして、感染不安に駆られる人々が感染者あるいは感染者を出した集団を攻撃し、排除する行動である。こうしたリスク認知をめぐる認識のずれや排除は、我々の社会のいたる所でみられる。とりわけ、こうした現象に強い既視感を覚えるのは、まもなく10年になる東日本大震災と福島原発事故後の出来事である。放射線という未知のリスクに直面し、「放射能がうつる」といった言説がもたらした福島県民に対する差別や、風評被害の数々は記憶に新しい<sup>2</sup>。

被ばくリスクへの認知の差、対処行動の違いは避難や帰還の判断めぐって、地域住民間、あるいは家族内においても深刻な分断を発生させた。とりわけ放射線の影響を受けやすい幼い子どもを抱えた保護者のなかには、リスク回避のために母子だけでも独自の避難行動をとらざるをえないと判断した世帯も少なからずあった。だが、「自主避難」に対しては行政の支援も早々に打ち切れ、周囲の人々や家族・親族さえ心ない言葉や視線が投げかけられ、分断に伴うトラウマは癒されぬまま今日に至っている<sup>3</sup>。

かつて「記録なくして事実なし」という言葉で、記録を残すことの大切

さを訴えた人がいた<sup>4</sup>。原発事故が人間の「からだ」、「こころ」、「つながり」にどのような影響をもたらすのか。福島県中通り9市町村に住んでいる親子の生活と健康を定期的に記録し、次の世代に伝えていく。そのために、私たち「福島子ども健康プロジェクト」は原発事故後、福島県中通り9市町村に在住する2008年度出生児とその母親（保護者）を対象に、2013年から毎年1月にアンケート調査、3月と8月にインタビュー調査を継続して実施している。そして、2019年には、これまでの7回の調査の回答結果を、回答者自身がふり返ることができるように「ふり返り手帳」を制作し、回答者の親子に返還する作業を行った。「ふり返り手帳」とは、調査対象者の7年間の個票データを全体平均と比較してまとめ、その変化をグラフに図示したものと、各回の自由記述欄に書き込まれた声（文字）をスキャンして、一冊の冊子にまとめたものである。2020年は、ワークショップ「語り合いの場ふくしま」を開催している。「語り合いの場ふくしま」では、原発事故後の生活をふり返り、語り合うことによって、コロナ禍と原発事故との重なりなど、複数の主体による多様な体験を共有する機会としたいと考えている。

今回のワークショップでは、私たち研究者か、あるいは、専門のファシリテーターにリードしてもらいながら、2～5人の母親（保護者）が参加し、原発事故後の現在までの生活・健康・心境変化をふり返り、互いの経験を語り合っている。ただ、ワークショップ「語り合いの場ふくしま」が目指すのは、開かれた対話の場を福島の内部に築くこと、そして、これに触発され、地元の母親（保護者）が自分たちでも対話の場を作りたいと思えるような仕掛けを行う対話実践である。これにより、われわれ研究者の介入が途絶えたとしても、自分たち自身で対話の場をつくり続け、単純な合意や結論ではなく、複数の主体による複数の声がポリフォニーを形成し、そのことが治療の資源となる方策とその仕組みを作ることにある。

こうした全体像から、本稿では、これまでの調査をもとに、原発不安の内容、表出の仕方、その特質を明らかにする。そのために3つの方法をとっ

ている。

1つめは、これまでの8回の調査票の自由回答欄に書き込まれた声を分類し、子育て中の母親の不安の諸相と特質を明らかにすることである。回答者の自由回答欄への記入割合は約45%～60%である。自由回答欄に「不安」「心配」に関する意見を書いている人の割合は一貫して6割を占め、原発不安が持続している。不安で多いカテゴリーは、「健康」、「生活」、「人間関係」、「情報」に関する項目であり、これら4つのカテゴリーについて考察した。

2つめは、母親の精神健康(SQD)の変遷を分析し、個人内の経年変化に関連する要因を特定することである。原発事故から2年後の2013年から2015年にかけての母親のうつに着目し、それに影響を与える要因を探索的に抽出した。

3つめは同一の調査対象の第1回から第3回までの自由回答の変遷を3つの基準で分類し、それを分析することで、原発事故後がもたらすストレスがどのような特質を持っているかを明らかにした。ここでは「トラウマ」という概念に着目して分析した。

## 2. 調査の概要

福島子ども健康プロジェクトの調査対象地域は、福島県中通り9市町村(福島市、郡山市、二本松市、伊達市、本宮市、桑折町、国見町、大玉村、三春町)である。これらの地域は、避難区域外であり、中間指針などで「自主的避難等対象区域」とされる。この地域の放射線量は避難区域より低い、局所的なホットスポットが存在していた。

調査対象者は、福島県中通り9市町村(福島市、郡山市、二本松市、伊達市、本宮市、桑折町、国見町、大玉村、三春町)に在住する2008年度出生児(2008年4月2日～2009年4月1日生まれ)6191名全員とその母親(保護者)である。2012年10月～12月に、9市町村の住民基本台帳から対象者を抽出した。対象者は原発事故当時、1～2歳で外遊びが本格的

に始まる年齢であったが、2013年1月の第1回調査時点では3～4歳である。2020年1月時点は小学校5年生である。

この地域を選んで調査した理由については以下の通りである。この地域は避難区域に隣接し、原発事故の被害の裾野の広がりを体現する地域であり、健康影響の不確実性が高い地域である。したがって、リスクへの対処が先鋭に問われる地域である。また、リスク認知や対処行動の違いと補償格差などによって、地域社会で葛藤や分断が生じやすい地域である。

調査方法は同一対象者への追跡調査、すなわち、コーホート調査（パネル調査）である。各年の調査対象者数と回答数、自由回答欄記入率等を下記に示した。2013年1月の第1回調査は、2012年10月の住民基本台帳から対象者を抽出し、その対象者6191名あてに調査票を送付した。第1回調査に回答した2628名に2014年1月第2回調査票を送付し、これに回答した1605名に2015年1月に調査票を送付した。それ以降、同様の形式で調査を続け、2020年3月23日の時点で回答者総数は702名である。調査票へ回答を記入しているのは、母親が全体の約95%を占めている。

	調査対象者数	回答数	回答率(%)	自由回答記入者数	記入率	総文字数	一人当たり文字数
第1回 2013年	6,191	2,628	42.4	1,203	45.8%	252,047	209.5
第2回 2014年	2,628	1,605	61.1	718	44.7%	153,938	214.4
第3回 2015年	1,605	1,207	75.2	746	61.7%	151,677	203.3
第4回 2016年	1,297	1,015	78.3	612	59.9%	117,171	191.5
第5回 2017年	1,026	912	88.9	549	60.2%	100,690	183.4
第6回 2018年	1,019	832	81.6	451	54.2%	82,812	183.6
第7回 2019年	936	814	87.0	442	54.3%	85,032	192.4
第8回 2020年	893	702	78.6	370	52.7%	69,601	188.1

(2020年3月23日時点)

表1 各年の調査の集計結果

### 3. 自由回答欄における原発不安

自由回答欄は調査票の最後の頁にあり、基本的に何をどれだけ書いてもよいスペースである。第1回調査と第2回調査では自由回答欄の記入率が約45%であるが、第3回調査以降は約60%、第6回調査以降は約55%である(表1参照)。第3回調査以降、自由回答欄の記入率が高くなった。その理由は、推測の域を出ないが、1つめは、第3回調査から自由回答欄のリード文の文言を変更し、記入しやすくなったからである。2つめは、第3回調査が行われる前の2014年11月に、第1回調査と第2回調査の自由回答欄の声を分類し、まとめた冊子を調査対象者全員に送付している。これにより、調査対象者の声に耳を傾ける姿勢を示したからではないかと考えられる。

まず、自由回答欄の声の変化から見ておこう。2013年の第1回調査から2020年の第8回調査まで福島で子育てをしている母親(保護者、以下同様)の声のうち一貫して多いのは、子どもの健康に関する不安である(図1)。原発事故による子どもの身体的な健康影響、精神的な影響に加えて、外遊びをさせられなかったことによる成長や発達の遅れを不安に思う声が多い。次に、原発事故から2年後の2013年には、子どもの健康不安と同じくらい多く見られた「外遊び」と「避難」に関する声であるが、時の経過とともに急激に減少している。時間の経過とともに、子供が成長し、外遊びのニーズが減っていること、避難の必要性が下がっていることがその原因として考えられる。原発事故から5年後の2016年には「除染」と「風化」に関する声が増加している。各地の生活空間に除染が進められる一方、原発事故の風化が進んでいることの表れだろう。2020年の第8回調査では「風化」に関する声が最も多い。

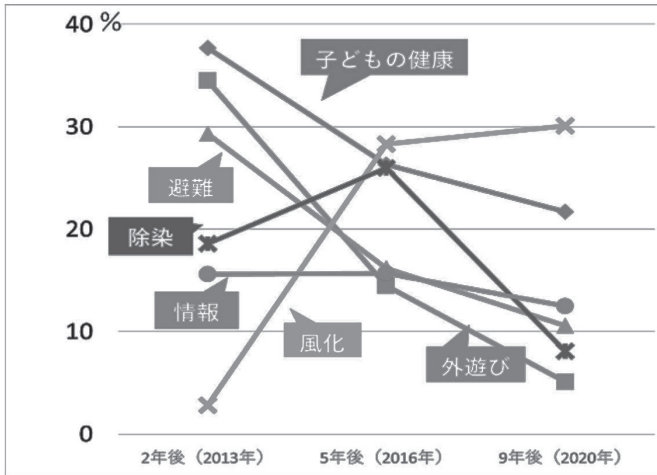


図 1 声の変化

次に、毎年の原発不安に関する代表的な声を紹介していくが、その前に、「放射能不安」ではなく、なぜ「原発不安」という用語を用いるのかについて少し付言しておこう。「放射能不安」という言葉は一般に放射能に曝露し、健康に影響が出ることを恐れる事態を指す。一方、「原発不安」は、それより広い概念である。それは、健康影響への不安に加えて、原発事故による人間関係への影響を含む。例えば、仕事や結婚・就職時の差別や偏見を恐れる事態、または、余震などで原発が大丈夫かと心配する気持ち、原発の再稼動に際して感じる不安なども含まれる。

### (1) 2013年の原発不安：すべての生活領域を制約する「ひび割れた世界」と弱者へのしわ寄せ

原発がなかったらさせてあげられる遊びや経験がたくさんあると思う。海水浴や外での遊び。月日がたって、外で過ごせる時間も多くなつたように思われるが、自分の子どもの頃とくらべるとホントに少ない。食生活では、安全とは言われても、あれば、高い値段でも、他県の商品を買い求

め、水(飲料水)は、いつも買い求めている。うちのような、母子家庭で、収入の少ない家庭では、大きな問題です。でも、子どもの健康を考えると、買わざるをえないし、やはり、将来がとても心配。もし、病気になったときに、こうかいしたくない……。あの時、ちゃんとしていれば…。この先、結婚する年齢をむかえた時にも、原発のあった、福島の女の子だからと、相手の方からけねんされることはないだろうかとか、考えれば、考えるだけ問題はつきないのですが…。今でも、地震が起きれば、子どもから笑顔が消え、こわがり、身がまえます。(中略)この不安な気持ちは、これから先も消えることはないと思います。これから先ずっと…。

## (2) 2014年の原発不安:「福島県産」に手を引っこめてしまう自分

放射能への不安について。自分自身、放射能がある生活に慣れてしまったことに不安を感じる。家の周辺は約 $0.2 \mu \text{sv}$ と決して低くはないが(と思っている)こんなものだと思って暮らしていることにたまにハッとする。食べ物について、市場に出回っているものは大丈夫だとは思っているのだが、「福島県産」となっていると、つい手を引っこめてしまう自分がいる。何か重要なこと(情報)が後々出てくるのではないかと思うと、不安である。

## (3) 2015年の原発不安:忘れていた時間が増えたが、将来は?

日常をとり戻している感じはしますが、やはりまだまだ震災、原発に対しての不安は残っています。予震も少なくなり、毎日の生活を送れている分、忘れていた時も前よりは増えてしまっていると思いますが、ニュースなどで目にする、まだ怖い…と感じます。本当の怖さはこれからなんだと感じています。子供たちが成長していくにつれての身体の心配も大きくなってくると思いますし、自分自身の健康への心配も少なからずあるのは事実です。子供たちが将来苦しまなくて(原発のことで…)済むように…なれば…とは感じています。



#### (4) 2016年の原発不安：まだ5年、もう5年

まだ5年、もう5年 そんな心境です。震災後、避難して2年後にまた福島へ戻ってきました。福島産の野菜や米は、食べないようにしたり、外遊びに抵抗を感じたり、戻ってきた直後は、いろいろ気を使っていましたが、今は空間線量もだいたい下がりが、大手スーパーなら、信頼できるかな・・・と福島産のものを購入したり、外遊びは全く心配しなくなりました。ただ、10年後、20年後のことが、不安になってきています。子供達が、病気になるまいでこのまま元気でいてくれることを願うばかりです。

#### (5) 2017年の原発不安：何が真実だったのか分からないまま6年

もう忘れたいという思いと、子供達の将来の健康について不安があるの、心配し続けなくてはならないという思いと、反対の思いがあります。何が真実だったのか、何が今の真実なのか、結局分からないまま6年がたってしまいました。両家の両親も、福島県内在中なので、このままこの地で、ずっと暮らしていきたいと思いますが、子供達の事だけが最後まで心配です。

#### (6) 2018年の原発不安：風化と将来の不安

一生福島に住み続けられるのか、それでいいのか、悩んでいて持ち家をもつ決心がつかなかったが、ようやくこの地におさまることを決め家を購入。以前住んでいたマンションには、避難民が、お金だけ払ってかっていた部屋があり、それを目のあたりにして不快であった。今度は、また原発補償金で建てられた家の近く。震災はいつでもどこにでもつきまどってくるのが嫌です。7年たち、すっかり風化しています。気にする人は変人のように扱われます。ガラスバッジは何のためにもたせているか？あまり関心をもたない人も多くなりました。息子も戸外であそぶのを好み、私もあまり放射線を気にしなくなったため、とくに制限もなく遊ばせています。7年たった今もあのときの映像をみると、フラッシュバックしてき

て、涙が止まらなくなったり、ふるえたりすることもあります。あの日の教訓を生かして、今の自分は何ができるかなと考えることは多いですが、行動には移さず終了。今のところ息子には何の異常もありませんが、今後の健康、未来に不安を感じずにはられません。2人目もあきらめることにしました。今ある幸せを大切に守っていくことで、私達は精一杯だと思っています。

### (7) 2019年の原発不安：8年後、庭に埋まっていた汚染土を掘り起こして移動されるときに不安な気持ち

震災からまもなく8年、娘は3/16に生まれたのでまもなく10才になります。先日、庭に埋まっていた汚染土を掘り起こして移動されていきました。埋まっていた袋はすっかり劣化しボロボロになっているものもあり、はたして除染土は適切に処理され、また移動する時期は適切だったのか、その状態で安全だったのか、残された周囲の土には影響がなかったのか…疑問しかありません。作業が始まったことにより、周囲の公園の土地が一時の置き場所となり、子どもが遊ぶ場所がないどころか、遊ぶ場所に集めているという現実に驚く毎日です。何がどう安全で心配なのか、全然分かりません。オリンピックでも福島が入っているからでしょうか…去年から今まで全く動きがなかった汚染土の作業が急ピッチかのように進み、始まった気がしました。これが現状と近況です。子どもの心配がなくなることはないでしょう。遊びの大切な時期に家に閉じ込めてしまったこと、放射能の体への影響は切り離せません。これと一緒に生活していくということはずっと続くと思います。その中で、長期休み時に保養を受け入れてもらい、伸び伸びと過ごさせる機会があることは、本当にありがたいことです。いつまでも心から心配してくださっている全国の方々がいることを感じます。

### (8) 2020年の原発不安：「過去のこと」と思っている自分と「先の不安しか見えない」自分

何事もなかったように日々過ごしています。しかし、各家庭に埋めた除染ごみが運び出されたり、公園が柵で覆われたりするのを見ると「原発事故は終わっていない」と思います。しかし、食べ物も問題なく、普通に生活している今、不自由は感じません。しかし東京オリンピックで「福島を聖火リレーコースから外せ」「福島産を食べさせるな」など各国の一部の報道を見ると「なぜ?」「なぜ福島を?」と憤りを感じます。この憤りをどこにぶつければ?この先、子どもたちは一生この思いをしていくのか?「過去のこと」と思っている自分と「先の不安しか見えない」自分とがいます。この葛藤は終わることがないのでしょうか。そう思ったら不安はありません。しかし、日々の生活での子どもたちの明るさに助けられています。

## 4. 原発不安の内容別分類：健康、生活、人間関係、情報

ここでは、「不安」、「心配」という心境を表す言葉を記入している自由回答を、その内容によってカテゴリー化し、分類していく。まず、自由回答に「不安」「心配」という単語を使っている人を数え(表3-a)、また、それらの単語を使っていなくても、「~のおそれがある」、「~がこわい」、「~が気になる」等の表現をしている人を数えた(表3-b)。さらに、自由回答欄に書かれた多くの不安や心配を訴える声を拾い集めるために、1人が複数のカテゴリーについて回答している場合は、カテゴリーごとに1件として集計した(表3-d)。例えば、将来の健康と、いじめへの不安を記入している場合は、「健康」と「人間関係」の2つのカテゴリーにそれぞれ1件としてカウントしている。外遊びと情報への不安を記入している場合は「生活」と「情報」の2つのカテゴリーにそれぞれ1件ずつカウントした。

	a)「不安」か「心配」の言葉を書いている人数と割合	b)「不安」「心配」以外の言葉で書いている人数と割合	「不安」「心配」に関する意見を書いている人数 (a+b) と割合	c) 自由回答記入人数	d) 自由回答欄の「不安」「心配」の声の件数 (同じ人の複数の声あり)
第1回 2013年	589 (49.0)	217 (18.0)	806 (67.0)	1203	1335
第2回 2014年	316 (44.0)	116 (16.2)	432 (60.2)	718	600
第3回 2015年	344 (46.1)	147 (19.7)	491 (65.8)	746	632
第4回 2016年	253 (41.3)	113 (18.5)	366 (59.8)	612	535
第5回 2017年	243 (44.4)	94 (17.2)	337 (61.6)	547	422
第6回 2018年	182 (40.4)	85 (18.8)	267 (59.2)	451	350
第7回 2019年	166 (37.6)	95 (21.5)	261 (59.0)	442	337
第8回 2020年	117 (31.6)	54 (14.6)	171 (46.2)	370	244

表2 自由回答欄に「不安」、「心配」に関する意味内容を記入した人数と件数

自由回答欄に「不安」「心配」に関する意見を書いている人の割合は、ほぼ6割を占めていたが、2020年には5割を下回った。第1回調査(2013年1月)では67.0%、第2回調査(2014年1月)では60.2%、第3回調査(2015年1月)では65.8%、第4回調査(2016年1月)では59.8%、第5回調査(2017年1月)では61.6%、第6回調査(2018年1月)では59.2%、第7回調査(2019年1月)では59.0%、第8回調査(2020年1月)では46.2%である。この結果から、原発不安は減少傾向でありながらも持続していることが認められる。

原発不安を「不安」「心配」という言葉を直接使って表現している人とそれ以外の言葉で表現している人の割合は下記の通りである。第1回調査では49.0%と18.0%、第2回調査では44.0%と16.2%、第3回調査では46.1%と19.7%、第4回調査では41.3%と18.5%、第5回調査では44.4%と17.2%、第6回調査では40.4%と18.8%、第7回調査では37.6%と

21.5%、第8回調査では31.6%と14.6%。この傾向も、「不安」「心配」という言葉を直接使って「原発不安」を表現している人が30%から40%、それ以外の言葉を使って「原発不安」を表現している人が15%から20%で一貫している。

次に、カテゴリー別に原発不安を詳しく見ていく。原発不安で多いカテゴリーは、「健康」、「生活」、「人間関係」、「情報」に関する項目である。

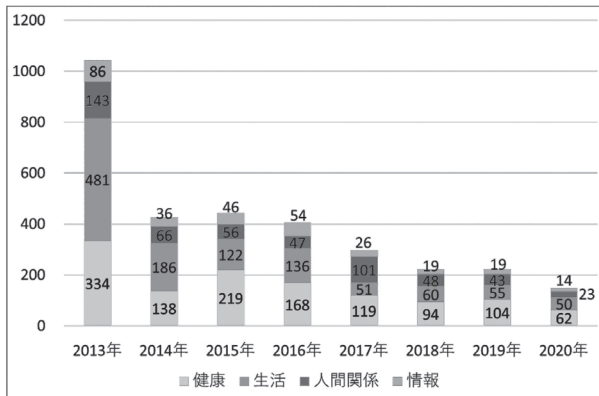


図2 自由回答における原発不安のカテゴリー別の件数

第1回調査では「生活」が最も多く、第8回調査では「健康」が多い。全体的な傾向としては、「生活」に関連する不安が年々減少する一方、「健康」に関する不安は持続的に多い。これを各年の不安の表現の全件数（表3-d）に対する割合で示したものが下記のグラフである。「人間関係」の割合が2017年に急増したのは、横浜で起こった原発避難者へのいじめ事件への報道があったからであると考えられる。

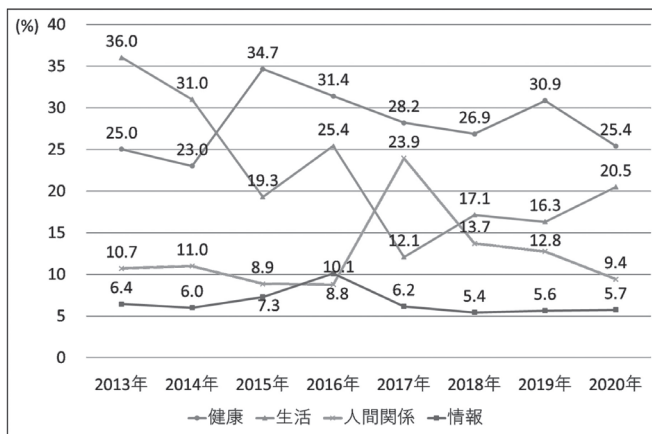


図3 自由回答における原発不安のカテゴリー別の割合

「健康」は自由回答全体のなかで一貫して2割から3割を占め、2015年からは最も多い。「健康」のなかでも最も多いのは、子どもの「将来の健康不安」である。その次に「現在の健康不安」、「体力低下による健康不安」、「出産」が続く。第1回と第2回に比べ、第3回調査以降、福島県民健康調査の甲状腺検査の結果が発表され、甲状腺ガンが報道されるなどした結果、「将来の健康不安」がさらに増加している。

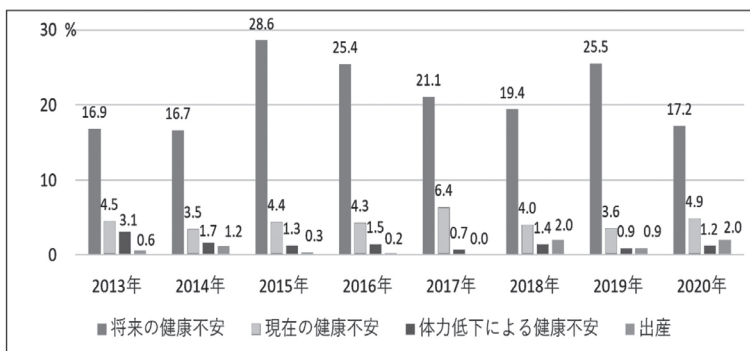


図4 健康不安

次に、「生活」で多いのは、「外遊び」、「食べ物」、「住むこと（避難）」、「除染」に関する声である。第1回と第2回では放射能の不安から「外遊び」を制限しているという声が多い。ただ、「外遊び」、「食べ物」、「住むこと（避難）」に関する不安は年々減少傾向にある。第4回では、「除染」に関する不安が多く、その中でも、除染作業員による治安について不安を抱いている傾向がある。

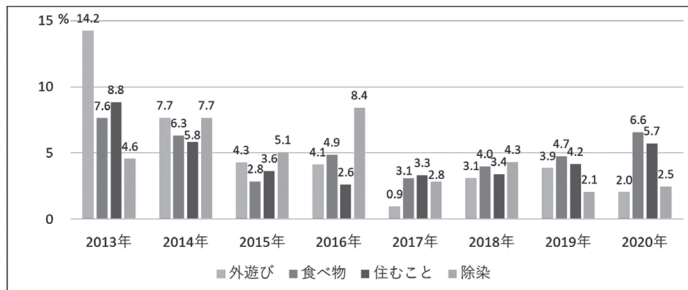


図5 生活不安

「人間関係」は「いじめ・差別」と「周囲との認識のずれ」である。「いじめ・差別」の割合は、やや横ばいであったものが、第5回調査（2017年1月）で急増し、自由回答全体で2割以上に達している。原発いじめの報道により「人間関係」への不安が増幅する一方、「周囲との認識のずれ」は少しずつ減少している。

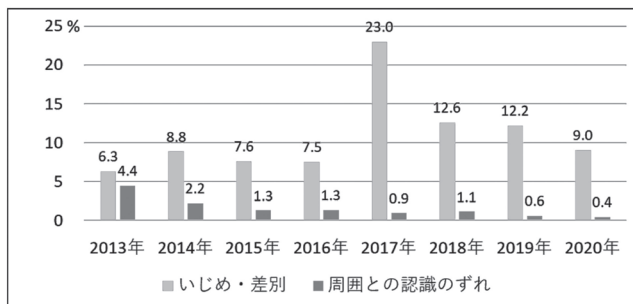


図6 人間関係の不安

「情報」の中で、当局や東京電力などが「情報を隠しているのではないか」、「どの情報を信じたらよいかわからない、情報が信じられない」という不安が多く、第1回と第4回で多い。同時に、「原発事故が忘れられているのが不安」、「風化することが不安」という声は年々増加傾向にある。

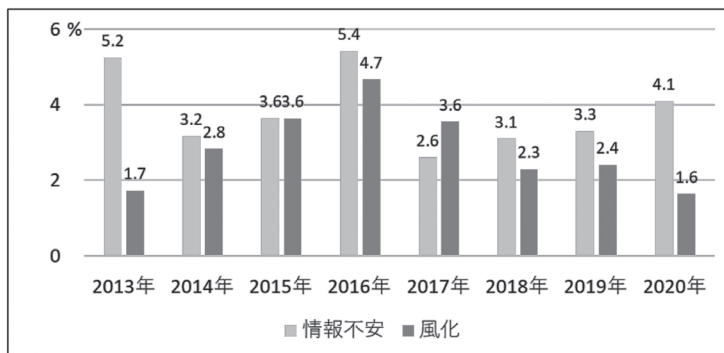


図7 情報の不安



## 5. 原発不安の表出の仕方の変化

第1回調査と第8回調査では、原発不安の表出の仕方が異なる。2013年の自由記述欄は、強い不満や怒りで満ち溢れている。その中には、調査主体に対する不信、調査されること自体への失望、東京電力や国・県・市など行政への憤りや要望も多く、その後、時間が経過するにつれ、諦めと風化が加わり、不安の「強度」が緩和されている。同一の回答者の2013年から2020年に自由回答がどのように変化しているのか、以下にそれを例示しておく。

Aさん

「原発事故以来、ずっと子供達と自分（妊娠時）の飲み水は買っているので少しでもいいから国や市や県が無料で安全な飲料水を配布してくれれば良いと思う。いくら安全と言われても、体に入るものなのでこわいです。そして、東京電力の賠償も1回より2回目は、明らかに減っていて少しも納得できないどころか、このまま無くなったら本当に苦しい。仮設など、家を無くした方々はもちろんだが、郡山でも、放射能の数値は高いし、子供もいるのに、もっと生活が楽になるような手当てや賠償、保障があるべきと思う。」(2013)

「子どもたちの身体に何か異変が表れるのではないかと日々不安に思っています。放射能の影響がどのくらいあるのか、これから病気として表れてくるかもしれないという心配はずっとあります。」(2020)

## Bさん

「子どもの体力面が不安（外遊び出来ないの）。外遊びもさせたくない。『大丈夫』とか『ただちに健康被害はない』とかいわれても低線量被ばくが不安、補償費でごまかされているような気がする。情報を包み隠さず全て出しているのか疑ってしまう。みんな口には出さないけど、どう思っているのかとは考える。」(2013)

「震災の風化を強く感じます。あまり影響がなかった地域に住んでいるせいかもしれませんが。震災前から比べて治安というか、マナーが悪くなったと感じます。気のせいかもしれませんが、震災後、他の地域から色々な人が入ってきているのかな、とも思います。運転中や買い物中などで気になることがあります。甲状腺の検査をすると、長女はいつも所見ありの経過観察となります。精密検査が必要なほどではないようですが今後が心配です。」(2020)

## Cさん

「東京電力、大キライです。誠意がないし、ふるさとをうばわれた人の身になれ！と思います。休日返上で除染しに来いと思います。」(2013)

「まもなく9年になりますが、正直、放射能のことは忘れてる感じですか。役所からの情報や周りの状況を考えると、“ここで暮らしていても大丈夫だろう”と思います。原発事故で大変な思いをしたから、子育てにかかる苦労（インフルエンザや反抗期の対応、その他子育ての心労など）は福島の人はナシなどということではなく、他の日本中の子育て中の親さんとまったく同じく、冬になればインフルやノロの心配、その他諸々抱えて生きているのです。正直、放射能が心配とか、保養がどうか言っているヒマはないのです。確かに原発事故はひどかった。いろんな意味で許し難い。でもそこにエネルギーを注ぐのはもったいないのです。家族のくらし、毎日楽しく元気に笑って生きる。子どもたちが大人になった時、誇れるような福島でありたい。福島出身であることを堂々と言えるような人間、ふるさとにしていきたいと思います。風評など笑い飛ばせです。」(2020)

## 6. 原発不安の年度別変化

では、年毎の自由回答欄で語られた原発不安を多い順で確認しておく。第1回調査で最も多いのは「将来の健康不安」である(225件)。そのなかには「放射能の影響や被害」、「病気や不都合が出ないか」、「漠然とした将来の健康不安」などが多い。次に多いのは「外遊び」(190件)であるが、放射能の不安から「外遊び」を制限しているという声が多い。三番目に多いのは「住むこと」(118件)に関する不安は「避難したいが、できない」、「福島に住み続けることへの不安」が多く寄せられている。

また、「食べ物や飲料水」(102件)への不安で「他県産の物を食べる、水道水を使わない」、「食べ物への一般的な不安」が多い。次に、「いじめ・差別」(84件)は「結婚・就職」と「差別全般」について不安を持っている。「情報不安」(70件)も「情報を隠している、信じられない」、「さまざまな情報があってどれか正しいのかわからない」などが多い。

さらに、「除染」(61件)は「除染が遅い」、「除染をしてもらえていない」、「除染がいつなのかわからない」などが多い。次に、「現在の健康不安」(60件)は「精神的に不安定やストレス」、「病気、障害、肥満」などを報告している。「周囲との認識のずれ」(59件)は「対立がある、意見された、それがストレスになった」、「放射能に関しては話題にしにくい」が多い。

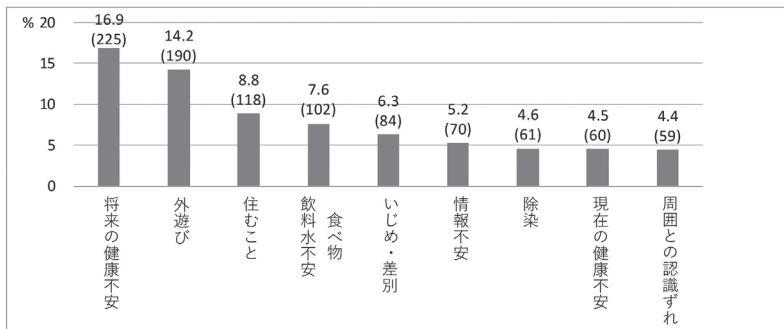


図8 第1回調査(2013年)で多かった原発不安

第2回調査の自由回答欄で語られた原発不安で最も多いのは「将来の健康不安」である(100件)。そのなかには「放射能の影響や被害」、「漠然とした将来の健康」について不安が多い。次に多いのは「いじめ・差別」(53件)についての不安である。「差別全般」、「結婚・就職」、「県外に出た時」の不安などである。さらに、「外遊び」(46件)は放射能不安で「外遊びを制限している」という声が多い。「除染」(46件)は「除染後も安心できない」、「除染が遅い」という声が多い。「食べ物・飲料水不安」(38件)は「食べ物への一般的な不安」、「他県産の物を食べている」という声が多い。「住むこと」への不安は「福島に住んでいること」、「住み続けること」への不安が多い。

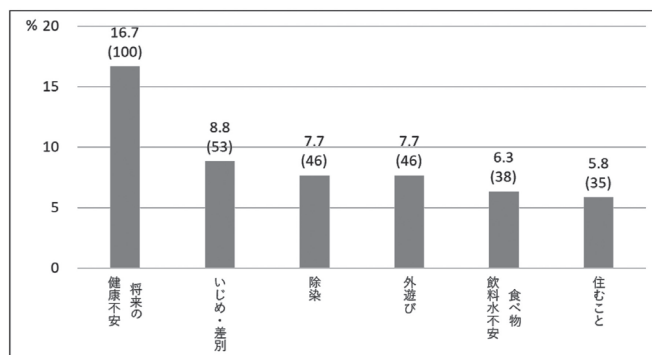


図9 第2回調査(2014年)で多かった原発不安

第3回調査で原発不安に関する声で最も多かったのは「将来の健康不安」である(181件)。そのなかには「放射能の影響や被害」、「漠然とした将来の健康」についての不安が多い。次に多いのは「いじめ・差別」(48件)についての不安である。「県外に出た時」、「差別全般」、「結婚・就職」の不安などである。「除染」(32件)は「除染が遅いのでは」、「除染してもらえない」という声が多い。「将来への不安」(31件)は「漠然とした将来」、「賠償への不満」、「避難してきた人とのつきあい」への不安が多い。

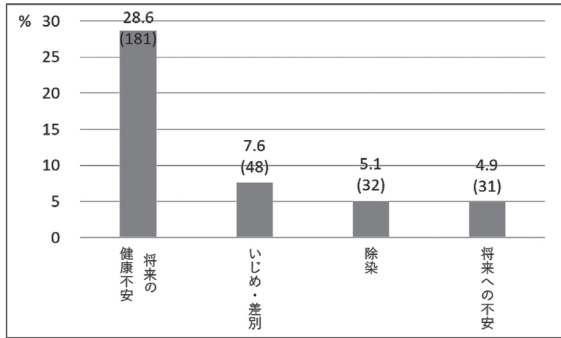


図 10 第 3 回調査 (2015 年) で多かった原発不安

第 4 回調査における「原発不安」で最も多かったのは「将来の健康不安」である (136 件)。そのなかには「放射能の影響や被害」、「漠然とした将来の健康」についての不安が多い。次に多いのは「除染効果」(45 件) についての不安である。「除染土の保管場所」への不安、「除染後も安心できない」という声が多い。「いじめ・差別」(40 件) は「結婚・就職」への不安、「子どもの将来」を心配する声が多い。「情報不安」(29 件) は「情報が信じられない」、「正しい情報を知りたい」、「不安をあおられる」という声が多い。

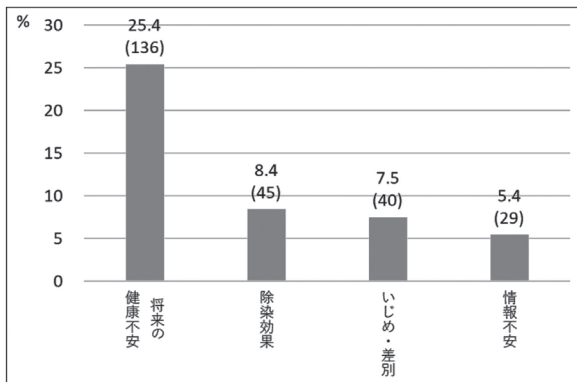


図 11 第 4 回調査 (2016 年) で多かった原発不安

第5回調査の「原発不安」で最も多かったのは「いじめ・差別」の不安である(97件)。その中には「報道・ニュースから」、「県外に出た時」の不安が多い。次に多いのは、「将来の健康不安」(89件)である。「放射能の影響や被害」、「漠然とした将来の健康」への不安の声が多い。さらに「地震がまた起こったらという不安」である。2016年に東日本大震災の余震と思われる地震が多く発生したことが影響しているとみられる。「漠然とした不安」、「原発が心配」、「恐怖を感じる」という声が多い。地震が起きる度に、「3・11」を思い出し、フラッシュバックを起こしている模様だ。

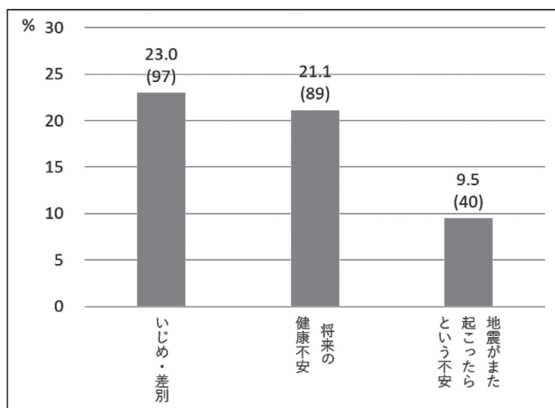


図 12 第5回調査(2017年)で多かった原発不安

第6回調査で最も多かったのは「将来の健康不安」である(68件)。その中には「放射能の影響や被害」、「漠然とした将来の健康」の不安が多い。次に多いのは「いじめ・差別」への不安(44件)である。「報道・ニュースから」、「県外に出た時」への不安の声が多い。次に多いのは「地震がまた起こったらという不安」である。引き続き、「漠然とした不安」、「原発が心配」、「恐怖を感じる」という声が多い。

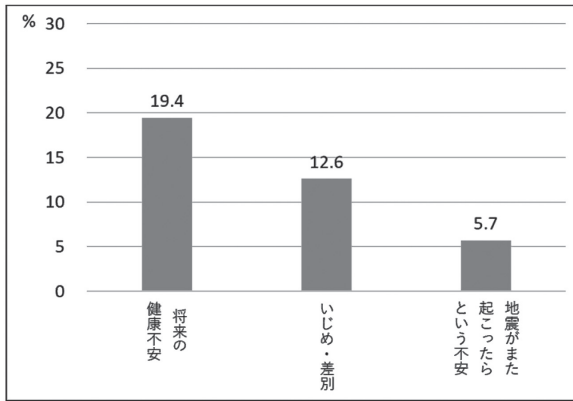


図 13 第 6 回調査 (2018 年) で多かった原発不安

第 7 回調査で最も多かったのは「将来の健康不安」である (86 件)。その中には「放射能の影響や被害」、「漠然とした将来の健康」の不安が多い。次に多いのは、「いじめ・差別」への不安 (41 件) である。「報道・ニュースから」、「県外に出た時」への不安の声が多い。次に多いのは「食べ物・飲料水不安」、「放射能に対する不安」の順である。風化が進む中での日常生活に不安を抱いている人がいる。

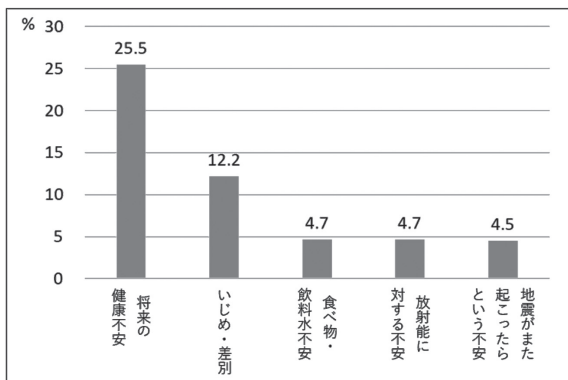


図 14 第 7 回調査 (2019 年) で多かった原発不安

最後に、第8回調査で最も多かったのは「将来の健康不安」である(42件)。その中には「放射能の影響や被害」、「漠然とした将来の健康」の不安が多い。次に多いのは「いじめ・差別」への不安(21件)である。「県外に出た時」、「将来結婚する時」への不安の声が多い。次に多いのは「食べ物・飲料水不安」、「地震がまた起こったらという不安」の順である。世間の風化に加え、2019年秋には台風での水害もあり、将来への不安を強く感じる声もみられた。

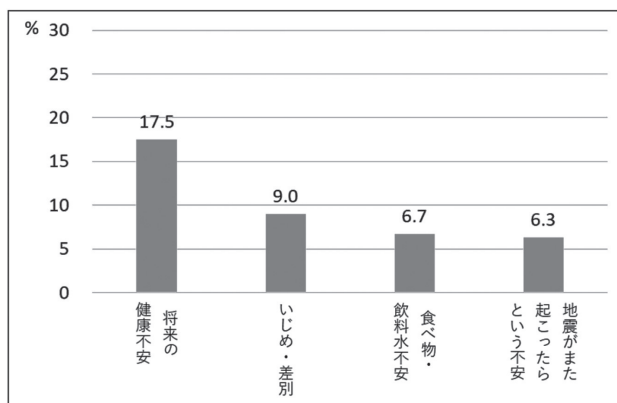


図 15 第 8 回調査 (2020 年) で多かった原発不安

## 7. 原発事故後の生活変化

これまでの自由回答と関連する項目が多い質問項目の「福島原発事故後の生活変化」について確認しておこう。原発事故後の日常生活の変化について、2013年1月の第1回調査では12項目を「事故直後」「事故半年後」「この1ヶ月間」の3つの時期に分けて質問した。第2回調査以降は上記に加えて、「放射能に関してどの情報が正しいのかわからない」、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」の2項目を追加して14項目となった。ここでは、2013年1月から2020年1月までの8時点の原発事故による生活変化の傾向を下図に示す。



親子の生活変化は大きく4つの傾向が認められる。

1つめは、事故から9年近く経過した時点で、5割近くが「あてはまる」と回答し、高止まり傾向が続いています。その項目は、「補償をめぐる不公平感」「放射能の情報に関する不安」「いじめや差別への不安」の三つである。2つめは、ゆるやかな減少傾向にありながらも約3割から4割が「あてはまる」と回答している項目（「健康影響への不安」「経済的負担感」「保養への意欲」「子育てへの不安」）である。3つめは、「あてはまる」が急激に減少し、その後、横ばいとなっている項目（「地元産の食材を使用しない」「洗濯物の外干しをしない」「避難願望」）である。4つめは、事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移している項目（「放射能への対処をめぐる配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」）である。以上の事実は、原発事故から9年が経過したものの、親子の生活は今なお原発事故の影響が続いていることを示している。

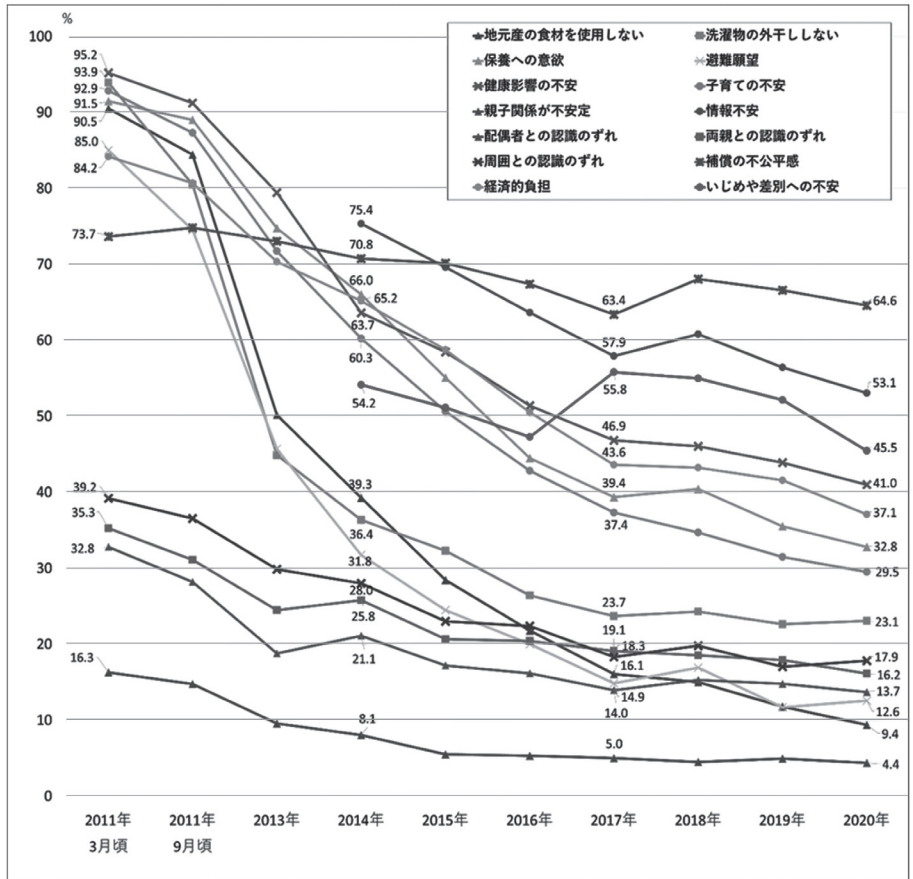


図 16 原発事故後の生活変化

## 8. 母親の精神健康の個人内変化と関連要因

ここで分析に用いたのは、「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」において、第一に、原発事故発生時に調査対象地域の9市町村に居住し、第二に、「福島子ども健康プロジェクト」の第1回～3回の調査すべてにおいて「母親」が回答している1004人の標本である。母親の精神健康は、災害精神保健に関するスクリーニング質問票SQD (Screening

Questionnaire for Disaster Mental Health) の指標で測定した。SQD はうつと PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder : 心的外傷後ストレス障害) に焦点をあて、リスクが高い人をスクリーニングする 12 項目の質問票である。

図 17 には、2013 年から 2015 年までの 3 時点における母親の「精神健康不良」の割合を示した。

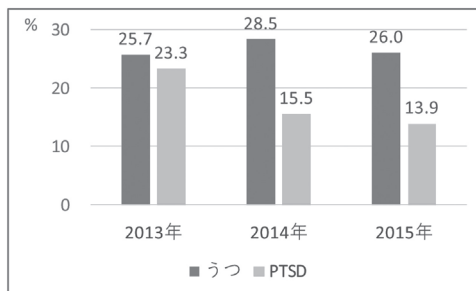


図 17 うつと PTSD の割合

うつと PTSD は異なる経過を辿っている。原発事故から 2 年後の 2013 年は、約 25% がうつ状態と PTSD に判定された。ところが、2014 年には PTSD は大きく低下し、2015 年もその傾向が続いている。一方、うつ状態は、2013 年から 2015 年までの 2 年間、ほとんど変化していない。すなわち、時間が経過しても 25% 以上の方がうつ状態を継続している。

ちなみに、第 1 回調査 (分析対象者数 2611 名) におけるうつ状態の割合は、牛島ら (2014 年) によると「事故直後」が 52.0%、「事故半年後」が 41.3% であった。つまり、「事故半年後」から「2013 年 1 月」の間に、うつ状態の人の割合は急激に減少し (41.3% → 25.7%)、それ以降は横ばいの水準である。これは、事故後急速に減少した精神健康不良が、それ以降は減少することなく、高い水準で持続していることを意味する。

次に、精神健康の個人内変化を確認しておこう。2013 年から 2015 年までの 3 時点における個人内変化のすべての類型とその分布を示したのが下表である。

	2013年	2014年	2015年	8類計%	4類計%	N
正常維持	正常	正常	正常	57.1	63.3	565
	正常	うつ	正常	6.3		62
正常→うつ	正常	うつ	うつ	5.4	11.0	53
	正常	正常	うつ	5.7		56
うつ→正常	うつ	正常	正常	6.4	10.5	63
	うつ	うつ	正常	4.1		41
うつ維持	うつ	正常	うつ	2.4	15.2	24
	うつ	うつ	うつ	12.7		126

表3 SQDの個人内変化の類型と分布 SQD (うつ)

	2013年	2014年	2015年	8類計%	4類計%	N
正常維持	正常	正常	正常	70.4	72.7	693
	正常	PTSD	正常	2.3		23
正常→PTSD	正常	PTSD	PTSD	1.4	4.3	14
	正常	正常	PTSD	2.8		28
PTSD→正常	PTSD	正常	正常	9.3	13.5	92
	PTSD	PTSD	正常	4.2		41
PTSD維持	PTSD	正常	PTSD	2.0	9.5	20
	PTSD	PTSD	PTSD	7.5		74

表4 SQDの個人内変化の類型と分布 SQD (PTSD)

うつ状態について確認すると、一貫して正常であった人は57.1%である。それ以外の42.9%の人が、3時点のうち少なくとも一度はうつ状態であった。2013年から2015年までの2年のあいだにうつ状態を経験している人が4割以上という数値は非常に高いと言わざるを得ない。一貫してうつ状態にあった人は12.7%である。また、4類型のうち「変化」に注目すると、正常からうつ状態へと変化した人、うつから正常へと回復した人は、それぞれ10%程度であった。

次に、精神健康の悪化と回復に影響を与える要因について確認しておく。以下の分析では、より多くの母親が経験している「うつ状態」についての分析結果のみを報告する。上記の牛島ら(2014年)においては、原発事故後の生活変化(放射能への対処をめぐる「配偶者・両親・近所や周

囲の人との認識のずれ」と「経済的負担感」がK6（一般精神健康調査票の6項目）で評価される母親の精神健康を悪化させていることを指摘した。

ここでは、2013年の第1回調査の上記の知見に基づき、2013年から2015年までの2年間の母親の精神健康の軌跡を規定する要因を探るために、独立変数を①放射能への対処をめぐる認識のずれ、②世帯収入、③経済的負担感とし、従属変数を精神健康の個人内変化3類型とし、多項ロジスティック回帰による多変量解析を行った。なお、地域の放射線量、職業、学歴、ソーシャルサポートなどの要因を統制した（表5）。

結果、第1に、世帯年収の400万円未満の人は、「正常維持」の人より、1.75倍有意に「うつ維持」になりやすい。第2に、放射能への対処をめぐって夫との認識のずれがある場合は2.28倍、両親との認識のずれがある場合は1.78倍、それぞれ有意に「うつ維持」になりやすい。第3に、経済的負担感についても有意であり、経済的負担感がある層が2.12倍有意に「うつ維持」になりやすいことがわかった。

この分析結果から、世帯収入が低く、放射能への対処をめぐって身近な人と認識のずれを感じ、経済的負担感をかかえている母親において、精神健康の不良が持続する「うつ維持」が多いことが明らかになった。

	正常→悪化	うつ→正常	うつ維持
夫との認識のずれあり	－	－	2.28
両親との認識のずれあり	－	－	1.78
近隣との認識のずれあり	－	－	－
400万未満	－	－	1.75
経済的負担感あり	－	－	2.12

表5 うつ状態の個人内変化3類型の関連要因

\* 「正常維持」に対するオッズ比。

「－」は有意な結果がみられなかったことを示す

以上の結果から、全体的に原発不安は持続していること、また、母親の精神健康は社会経済的要因が大きく関与しており、それを改善するためには一層の社会的なサポートが必要であることが明らかになった。

## 9. 原発不安の特質：持続的なトラウマ

ここでは、自由回答欄に継続して記入している人の自由回答から、原発事故後の生活変化とその後の軌跡について検討したい。2013年から2015年にかけて行われた3回の調査において、3回とも自由回答を記入しているのは330人である。この330人の自由回答を次の三つの類型に分類し、その人数を確認した。第1に、原発事故というカタストロフが生じた後、自らの生活を以前と同じレベルまで十分に再構築できていない人(229人)、第2に、原発事故後、事故前の状態に戻って生活できている人(51人)、第3に、原発事故後、新たな成長を遂げたり、新たなアイデンティティを獲得したりした人(14人)。

原発事故の衝撃の後に、自らの生活を再構築できずにいる229人の自由回答から、その原因を探った(以下、重複回答)。原因のうち最も多いのが、除染が続く生活環境、食べ物、子どもの外遊びなどで、放射能の脅威に不安を感じ続けているという回答である(85人、37.1%)。次に多いのは、子どもの将来の健康への不安、将来子どもが就職・結婚などにおいて差別されるのではないかと不安である(68人、29.7%)。これに続くのが、補償の不公平感、避難者への不満(46人、20.1%)、行政や東京電力への不満(28人、12%)、原発事故、放射能の脅威などに疲れた、忘れたい、諦めた(27人、12%)、放射能対処をめぐる経済的負担感(23人、10%)、検査結果、自分や周囲の人に身体に影響が現れた(22人、10%)、情報不安・不満(21人、9.2%)、除染作業員への不安(10人、4.4%)である。

次に、原発事故後、事故前の状態に戻って生活できている人(51人)の自由回答は、「震災・事故のことを気にすることは普段はほとんどなくなりました。」、「当時と比べて落ち着いた生活ができています。」、「子ども

たちは震災前と変わらない生活をしています。」「普段は気にすることなく過ごしています。」などである。このカテゴリーに属する多くの人が、事故前の生活状態に回復しているが、このうち約2割(11人)は、「放射能健康影響について不安が大きい。」と感じており、また「放射能への対処などで経済的負担を感じている。」とも回答している。

さらに、原発事故後、新たな成長を遂げたり、新たなアイデンティティを獲得したりした人(14人)の自由回答は次のようなものである。「被災時はパニックになりましたが、現在ではそのパニックになったことを恥ずかしく思います。原発事故や線量の存在を忘れてはいけませんが、そんなことよりももっと楽しいことを求めて日々生活することが健康につながると感じます。」「いまだゼロではない放射線。存在を認め、私たちはそれらに対して、栄養のある食事で応じたいと考えています。今までも、これからも私たちの生活は世界が注目しているでしょうから、私たちは負けません。」「どんどん成長していく子どもを見ながら移住や避難など生活を変える選択は難しく、子どもの成長のために今できることをここ福島でやってあげたいと思えるようになりました。色々な逆境に負けず人の気持ちを思いやり心優しい強い人になってもらいたいとそんな風に子どもの支えになりながら私自身も一緒に成長していこうと思っています。」このカテゴリーに属する多くの人が、原発事故から「新しい日常」を逞しく創造しているが、このうち約半数(7人)は、「放射能健康影響について不安が大きい。」と感じており、また「放射能の対処などへの経済的負担を感じる」と回答していることも留意しておく必要があるだろう。

以上の自由回答欄の分析から、原発事故がもたらすストレスがどのような特質を持っているかを少し理論的に整理しておこう。

第1に、これまでトラウマ概念は、主体の脆さと結び付けられてきた。その人がそれ以前抱えていた欠陥を呼び覚ますことのない限り、真の「外傷(トラウマ)」となって現れることはなかった。だが、1990年代以降、トラウマ概念は新たな転換を迎える<sup>5</sup>。心的トラウマは、困難な状況にお

ける異常な反応、つまり、個人がそれまでに抱えていた欠陥と関連づけられやすい反応ではなく、異常な状況に対する正常な反応とみなす考え方である。このトラウマ概念はすべての人がトラウマの被害者になりうること、またレジリエンスを高めることによって将来的なトラウマを予防することができるという視点と両立することができるようになった。

第2に、これまでトラウマ曝露は、過去の終了した単一の出来事または一連のエピソードが現在の心身への影響として現れるものと考えられてきた。だが、原発災害におけるストレスの特質を考えると、現在及び将来の危険といった現在進行形の脅威、あるいは、持続的なトラウマ(Continuous Traumatic Stress)の影響がより重要である。原発事故の影響は、日常生活の秩序を掻き乱す過去の一撃(Post-Traumatic Stress Disorder)であるだけでなく、その影響は今なお持続し、将来においても不安と不適応をもたらす脅威であり続けていることを示している。持続的なトラウマ(CTS)は次の三つの特徴を持っている。1つめは、ストレス源となる状況の時間軸が過去ではなく、現在と未来にあること、2つめは、リアルな脅威と認知・想像される脅威とを区別するのが非常に難しいこと、3つめは、外部の防護システムが不在であること、これらの3つが、持続的なトラウマの特徴である<sup>6</sup>。

これまで8年間の合計8回の調査における自由回答欄の分析を通じて、原発事故と放射能汚染が、福島の子供にとって、現在及び将来の危険・脅威という持続的なトラウマとなっていることが明らかになった。ある母親は次のように述べている。「放射線のことや原発のことは、今後も子どものために、情報収集し、対応していかなければならないと思いつつも、つい意識が薄れ、無関心になっているようにも感じます。(中略)放射能は当たり前存在になり、天気予報と同じく放送されるそれを何の疑問もなく見るようになりました」。一方、他のお母さんは、「放射能の影響なのかなと思ってしまう。普段は忘れてすごしているけど、病気になるたびに不安がよぎってしまう」とも語っている。こうした状況で、福島の子供がレ



ジリエンスを獲得するためには、次の3つのことが重要であると考えている。

第1に、原発事故からの再生、あるいは、原発不安からの回復は、人それぞれであることを認めることだ。要するに、原発事故の受け止め方、原発不安の有様、原発事故からの回復の仕方、これらは各人各様で、それぞれ異なることを認識することである。

第2に、「再生」、あるいは、「回復」という言葉に違和感を覚える人もいることを認識することだ。「再生」や「回復」は各人によって違う受け止め方をされており、それらに共通する部分は「自分なりに事実を受け入れ、折り合いをつけていくプロセス」であるという点である。

第3に、こうした状況に対しては、ケアではなくサポートという言葉がより適格的であるということだ。それぞれ違うスピードで、新しい日常への道のりを歩んでいる。したがって、多様な選択ができるように手伝うことが重要である。これが、原発事故後の福島親子への伴走である。

社会が原発事故を自らの問題として、この現実に向き合うことが必要である。そのためには、母親が抱く将来の健康不安に対して真摯に受け止め、多様な選択を可能にする社会の仕組みを作ること、また、将来、医療的な対応が必要となる場合、原発事故健康被害補償法のような制度を構築し、それに向き合うことが必要不可欠であると考える。

---

## 〔注〕

<sup>1</sup> 本稿は、科学研究費助成事業（19H00614、15H01971）、トヨタ財団研究助成プログラム（D18-R-0325）の成果である。なお、これまでの研究成果は、「福島子ども健康プロジェクト」のホームページ（<https://fukushima-child-health.jimdo.com/>）の「研究成果」で無料でダウンロードできる。自由記述の入力と分類、原稿執筆作業においては、福島子ども健康プロジェクト事務局の方々にご助力い

ただいた。記して感謝申し上げたい。

- <sup>2</sup> 関谷直也『風評被害：そのメカニズムを考える』2011年、影浦峡『信頼の条件：原発事故をめぐることば』2013年を参照
- <sup>3</sup> 森松明希子『母子避難、心の軌跡』2013年、吉田千亜『ルポ 母子避難』2016年
- <sup>4</sup> 土本典昭、2019『不敗のドキュメンタリー：水俣を撮りつづけて』岩波書店
- <sup>5</sup> 「トラウマは、私たちにも、家族にも、友人にも、近所の人にも降りかかる。もはやトラウマを戦争帰還兵やテロの犠牲者、あるいは悲惨な事故の生存者だけの問題と捉えることはできない。私たちの社会は今、トラウマを強く意識する時代を迎えようとしている。トラウマをもつ人にとって、世の中はトリガー（トラウマを引き起こすきっかけ）に満ちている。当たり障りのない状況でさえ、大惨事の前触れのように知覚されてしまう。そして、このような経験は、現代においてはなんら特殊なものではない」、ヴァン・デア・コーク、ベッセル著、柴田裕之訳『身体はトラウマを記録する：脳・心・体のつながりと回復のための手法』と、セルジュ・ティスロン著、阿部又一郎訳『レジリエンス：こころの回復とはなにか』を参照。
- <sup>6</sup> Eagle G and Kaminer D. Continuous Traumatic Stress: Expanding the Lexicon of Traumatic Stress

## 〔文献〕

- セルジュ・ティスロン著、阿部又一郎訳『レジリエンス：こころの回復とはなにか』、2016、白水社
- ジュディス・L・ハーマン著、中井久夫訳、1999『心的外傷と回復<増補版>』みず書房
- 宮地尚子、2013『トラウマ』、岩波新書
- 蟻塚亮二、須藤康宏、2016『3・11と心の災害：福島にみるストレス症候群』大月書店
- Eagle G and Kaminer D. Continuous Traumatic Stress: Expanding the Lexicon of Traumatic Stress, Journal of Peace Psychology, 2013, 19 (2) , 85-99

- ロバート・J.リフトン著、榊井迪夫、湯浅信之、越智道雄、松田誠思、2009『ヒロシマを生き抜く：精神的考察（上）（下）』岩波書店
- 浜日出夫、有末賢、竹村英樹、2013『被爆者調査を読む：ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会
- 太田保之、三根真理子、吉峯悦子、2014『原子野のトラウマ：被爆者調査再検証こころの傷をみつめて』長崎新聞社
- 橋本明子著、山岡由美訳、2017『日本の長い戦後：敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』みすず書房
- 牛島佳代、成元哲、松谷満、阪口祐介、2014「福島県中通りの子育て中の母親のディストレス持続関連要因：原発事故後の親子の生活・健康調査から」『ストレス科学研究』29巻、84－92
- 成元哲、牛島佳代、松谷満、2017「原発災害からの生活復興（レジリエンス）とはなにか」『中京大学現代社会学部紀要』10、199-268
- 成元哲、牛島佳代、松谷満、2014「1,200 Fukushima Mothers Speak：アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』8（1）、91-194
- 成元哲、牛島佳代、松谷満、2015「700 Fukushima Mothers Speak:2014年アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』8（2）、1-74
- 成元哲、牛島佳代、松谷満、阪口祐介、2014「放射能災害下の子どものウェルビーイングの規定要因：原発事故後の福島県中通り9市町村の親子の生活・健康調査から」『環境と公害』44（1）、41-47
- 成元哲、牛島佳代、松谷満、阪口祐介、2015『終わらない被災の時間：原発事故が福島県中通りの親子に与える影響（ストレス）』石風社